

17. グレビ・ノ・バッテリー

一津屋や鳥飼、鶴野の水路には、グレビ、グレービーとかバッテリーと呼ばれた自動堰が設けられていた。水位の維持と舟の自由通行を両立させた画期的な発明である。

モンビで引水

井路から高い田に水を引く時期はモンビ（門樋）に板を落とし込んで水位を上げた。それが済んで板を全部抜くと、すぐ下流の自動堰グレビが機能して舟の通行を保証した。

グレビで舟は自由通行

一津屋の井路は、村に沿った幹線から 5 本の支線が田に向かって延びていた。舟の通行のため堰板を抜いてしまうと水位が下がって舟も通れない。そこで B のように可動式の堰板を上流側に傾けて取り付け、C のように舟の重みで押し上げ、通れば水圧で復元するというのがグレビの原理。

鳥飼中の工務店 H 氏は実際にグレビの修理を手掛けた人。氏の話と原図をもとに復元図を作成した。田からの帰りは下流から上がることになるので、C のように舟は堰板の背をそのまま乗り越えたが、田へ向かう時は、足で堰板を押し上げて舟を越えさせた。

大西多治朗が考案

グレビは昔味生村の村長、大西多治朗がアイディアを出し、別府の大工、石橋亀吉が試作を繰り返し、苦心の末に仕上げたと言う。一津屋では本線井路にはグレビはなく、一線から五線までの支線の井路に、それぞれ 2 ヶ所ずつぐらい設置されていた。

大西多治朗は一津屋の堤防脇の村道も一方を石段とし、外からの車が入ってこないようにしたアイディアマン。一津屋は淀川沿いの細長い村、村道は大切な刳干場だった。

グレビの復元図をつくる

A は上流側から見た図で、グレビは石橋の下橋脚に設置されていた。堰板は厚さ 2 寸 3 分から 2 寸 5 分、約 7.5cm で、2～3 枚の板をボルトで止めて 1 枚に仕立てた。

堰板は上流側に傾けて設置し、水圧で板が起きすぎないように両脇のコンクリートには斜めのトマリが作ってあった。堰板の下部には φ4.5cm 程の突起を取り付けて回転軸とした。この突起の取付け位置が難しく、釘で仮止めし、設置してみていい位置に決めた。

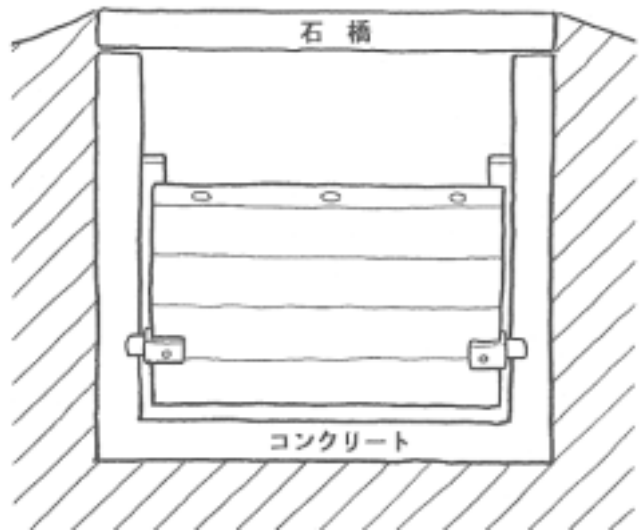
水の落差は 30cm あるなしで、水は堰板の下部の隙間からも流れ出ていた。

下流 1.5m までの井路底には水流でえぐられないようコンクリートが打ってあった。

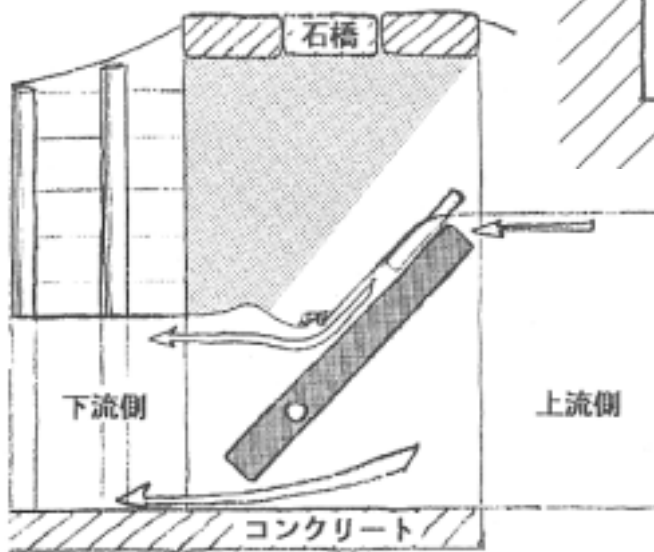
コンクリート護岸で消える

グレビのあった支線井路を訪ねたが、コンクリート護岸が進んで跡もなくなっていた。

A



B



C

